

中国資料に描かれた日本人像

遣唐大使の風貌を中心に

王 勇

われわれは自分自身の容貌や体型などが気になりますと、ごく自然に鏡の前に立ちます。そこに映し出される自分を傍観者の立場から眺めると、これまでに気がつかなかった側面が見えてくることがあります。人間とは、つねに周囲の目を意識しながら、威儀をととのえ、身なりをこなすものです。

人間はまた目前に決断を迫られ、未来に夢を描くときには、よく過去を振り返ってみます。つまり歴史から経験を学び教訓を汲み、それらを思索や判断の根拠にするわけです。この意味で、歴史も一種の鏡であり、歴史書のことを「かんがみる」の「鑑」または「かがみ」の「鏡」で命名する由来です。

さて、世界諸民族のなかでも、もっとも自分の姿勢に関心を示し、国際社会の視線が気になるといわれる日本民族にとって、自分自身をより正確に知るためにも、国際化にともなって新たな日本像を構築するためにも、中国に残された文字史料や画像資料が、量質ともに最高の鏡になるのではないかと考えられます。

1. 最古の倭人像

膨大な中国資料を万遍なく調べ出しますと、文字史料の海に溺れかねませんが、画像資料ならば、そう多くはありません。そのもっとも古いものは、**図1**の「梁職貢図」（南京博物院蔵）です。

考古学の世界では今や「古さ」を争って、六〇万年前という「最古」の石器を捏造してしまったという事件がつい最近あったばかりで、世間の目がきびし

く、「最古」という言葉をしばらく控えたほうがよいとは思いますが、この「梁職貢図」に描かれた日本人像は、六世紀前半の原画を十一世紀後半に模写したもので、日本人の肖像画としては文字通り最古の遺品と言い切れます。

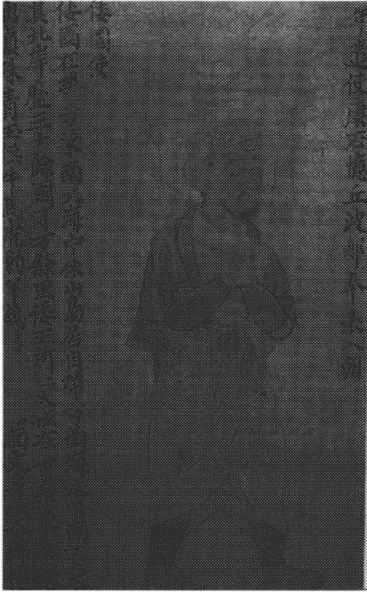


図1 梁職貢図（南京博物館）

六世紀といえば、日本史でいう大和時代にあたり、「倭の五王」がしきりに中国南方の諸王朝つまり『日本書紀』に出てくる「呉」に使節団を送りこんでいた時期と重なります。のちに梁の元帝になる太子の蕭繹が、荊州に刺史として在任中（五二六～五三九年）、梁と朝貢関係をもった三十五か国の使節をみずから描き写したのがこの「梁職貢図」の原画だったのですが、いま南京博物院が所蔵している北宋の熙寧十（一〇七七）年の模写本は、倭国使や百済使をふくめ十三か国しか残っていません。

ここで、倭国人の描き方と百済人の描き方にみられる相違は、思わぬ物騒を醸しました。歴史家の上田正昭氏は両者を比較してこう述べておられます。

百済国使が冠をつけ、礼服を着用して、靴をはいているのにたいして、倭国使は、布らしきものを頭に巻き、宏布を上衣として結び、腰に布を巻いて、手甲脚絆まがいよろしくはだしといういでたちで合掌している。首にも輪状の布を巻いているが、その風貌はいっこうにみばえはしない^①

どうも若きころの上田正昭氏は、光り輝く装束の百済使を鏡にして、幾重にも布に巻きつけられ、縫いぐるみみたいな倭国使を恥ずかしく思われ、さらに昔の倭国使を鏡にして、今のわが身を案じておられるようです。それだけならいいですが、問題はこのような見方によって、研究の立場が大きく左右されることです。

上田正昭氏は、これは古墳時代の埴輪人形像よりもお粗末で、ひとつ前の弥生時代つまり『魏志』（倭人伝）に述べられた倭人像を想像して描いた可能性が高く、六世紀の倭人はもうすこし進化しているはずだというふう論を張っておられるわけです。

ところが、図1をよくよく見ますと、その躍動感のあるリアルな描写に驚かすにはられません。いくら帝王の卵とはいえ、『魏志』（倭人伝）の簡略な文字表現からこのような精緻な倭人像を描けるという、六世紀の中国人の想像力がそこまで進化しているとは思われません。真実はまだ明らかではありませんが、千五百年前の祖先の姿を、依然として気にしている日本人の学者がいるということだけは確かでしょう。

そう思いますと、さっそく今の日本の方々にも喜んでもらえる遣唐大使の肖像を鑑賞することにしましょう。

2. 藤原清河（第十二次の遣唐大使）

職貢図というものは、しっかりした構図と主題とをもった芸術の完成品です。梁の職貢図のように、三十五か国の使節をずらりと目前に並べさせておいて、画家がゆっくりと描くことはまずありえないでしょう。したがって、これまでに個々に描きためていたものを素材として使うことになります。それは、正式の歴史書（正史）が編纂される時、実録や起居注そして公文書などといった原史料をふんだんに用いているのと同じです。

中国では、古くから外国の使節を画像に描きとめて、天子の威徳があまねく四方におよんでいることを賛えるならわしがありました。とくに威風堂々として礼儀正しい外国使節に対して、その肖像画をこしらえて保存し、それがのちに職貢図製作の素材として生かされることがあります。

このような仕事をつかさどるために、唐王朝は兵部に「職方」という部門を設置していました。『新唐書』（巻四六・百官志・兵部職方）によれば、「凡蕃客至鴻臚、訊其山川風土、為図奏之、副上職方。殊俗入朝者、図其容状衣服、

以聞（あらゆる蕃客が鴻臚に至ると、その山川風土を訊き、図を為してこれを奏して、職方に副え上る。殊俗の入朝する者は、その容状と衣服を^{えが}図いて以て聞す）」ということになっています。

さて、日本の遣唐大使のうち、その「容状」を描かれたという確証のあるのは、八世紀の半ばごろ（七五二年）中国へ渡って、鑑真の招請などさまざまなドラマを演出した第十二回遣唐大使の藤原清河でした。

鑑真にしたがって来日した思託という唐僧は、日本最古の僧伝とされる『延暦僧録』を著わしました。それによれば、玄宗皇帝は「彼国有賢主君、觀其使臣、趨揖有異（彼の国に賢い主君あり、その使臣を觀るに、趨揖に異あり）」と大使の礼儀正しい振る舞いや堂々たる風貌に大いに感激し、日本国に「有義礼儀君子国」たる称号を与えたのみならず、有司に命じて、「摸取有義礼儀君子使臣大使、副使影於蕃藏中、以記送遣（有義礼儀君子の使臣の大使と副使の影を摸して蕃藏に納め、以て送遣を記す）」つまり藤原清河をはじめ副使の同伴古麻呂と吉備真備ら三人の肖像画を作らせて、遣使の時期や経緯を記したうえで蕃藏に納めたのです。

「蕃藏」という語は他の文献を調べたところ用例が見つからず、その出典は今のところ不明です。増村宏教授は「諸民族資料館」と定義されていますが^②、それよりは先ほど引用した『新唐書』にみえる「職方」のほうに近いかもしれません。

「送遣」とは「送り返す」の意味です。唐人曇清の送別詩『奉送日本国使空海上人橘秀才朝献後却還』に「到宮方奏对、図像列王庭（宮に到り方に奏对せんとし、図像すでに王の庭に列ねたり）」と詠まれているように、肖像を描かれた空海と橘逸勢がそのコピーを本国に持ち帰ったことがわかります。中西進氏はこの点を汲んで「この時、大使の藤原清河と真備とは肖像を描いてもらい、その画を贈られたという。真備はその画像をもち帰ったであろう。清河はついに唐に没したから、彼の画は唐にとどめられたはずである」と推測されている^③。

藤原清河の肖像は、このように故郷に錦を飾れなかったのです。といいます

のも、本人が帰国の途中、琉球こと沖縄に到着しながら、逆風に吹かれて今のベトナムあたりに漂着し、乗組員の大半をうしなつて命からがら長安にもどり、そのまま異国に骨を埋めたのです。また副使の同伴古麻呂と吉備真備とは無事に帰国しましたが、この二人の肖像も杳として行方はわかりません。

3. 粟田真人（第八次の遣唐執節使）

藤原清河の肖像を諦めることとして、さかのぼって第八次の遣唐執節使をつとめた粟田真人に目を向けましょう。「執節使」とは天皇から国家権威のシンボルとして授けられた「節」を所持する方で、使節団の最高責任者として、その地位は大使よりも上にあります。遣唐使のなかで、その容貌を中国の文献にもっとも多く記されたのは、粟田真人この人です。

一行は大化改新後の新しい日本像を世界にアピールしようとして、七〇二年六月に筑紫を發つて、同十月ころ揚州よりやや北寄りの楚州の塩城県から上陸しました。地元の唐人は日本使だと知り、使者らの「風貌」を見て、「さすが君子の国だ」と感嘆したというエピソードは、『続日本紀』に伝えられています。

亟聞海東有大倭国、謂之君子国、人民豊楽、礼義敦行。今看使人、儀容大淨、豈不信乎？（しばし聞くに、海東に大倭国あり、これを君子国といい、人民は豊楽にして、礼義は敦く行われたりと。今、使人を看るに、儀容はなはだ淨く、豈に信ぜざらんや。）

右は遣唐使らの帰国報告にもとづく記録ではありますが、いくらか粉飾があったとしても、おおむね事実として受けとめてよいと思われます。といいますのは、それを裏づける記録は、中国側の文献にも見いだされるからです。

まず『旧唐書』（日本伝）をひもときますと、「冠進徳冠、其頂為花、分而四散。身服紫袍、以帛為腰帶（進徳冠を冠り、その頂に花を為り、分かれて四散せり。身は紫袍を服し、帛を以て腰帶と為す）」という細やかな装束描写につづきまして、その学問と容貌について「好読経史、解属文、容止温雅（好んで

経史を読み、文を属るを解し、容止は温雅なり)」と書かれています。

また表現上の小異はあるものの、『新唐書』『通典』『唐会要』といった信頼のおける歴史書にも、似たり寄ったりの記録があります。とにかく、粟田真人はときの則天武后にもよい印象を与えたらしく、麟徳殿の盛宴に招かれたのみならず、司膳卿という名誉職まで授けられたそうです。

粟田真人に関するきめ細かな「冠」「袍」「腰帯」「容止」の描写によって、『新唐書』（巻四六・百官志・兵部職方）にみられる「殊俗入朝者、図其容状衣服」の記述が思い出されます。五代に成った『旧唐書』の撰者が原資料をありのまま引用したのか、それとも肖像画を見ながら記録したのか詳らかではありませんが、粟田真人の肖像が描かれていたのではないか、という疑問が思わず脳裏をよぎったのです。

実は、この疑問の由来には、ドラマがあったのです。一九七一年七月、陝西省乾県にある唐の章懐太子の墓が発掘され、墓道の東壁には『礼賓図』（客使図とも）が描かれていたことがわかりました^④。



図2 礼賓図

図2をご覧になっていただきますと、左の三人は唐の鴻臚寺つまり外務省の役人で、右の三名は外国の使節とされます。問題人物は右から数えて二人目です。壁画発見の当初は、「進徳冠を冠り云々」と『旧唐書』に記されていた粟田真人ではないかという見方がかなり有力でした。⁵⁾

「進徳冠」とは、よく調べますと、中国では次代の天子になるべき太子の専用帽子だったことが明らかになっています。『旧唐書』に「矜大にして実をもって対えない」とある日本使の誇張癖への批判がこの冠と関連があったかもしれません。

ところで、壁画の問題人物には、冠らしいものはなく、粟田真人と認定するには頭上に挿している二本の鳥羽が邪魔になります。その後の研究で明らかになったことですが、高句麗の貴族は頭に二本の鳥羽を挿す風習があり、今では日本使だと主張する研究者はほとんどいなくなりました。

4. 吉士長丹（第二次の遣唐大使）

粟田真人も駄目でした。しかし、すべてを諦めるのはまだ早いです。第二回目の遣唐使にさかのぼりましょう。六五三年に一行百二十一人を引率して中国へ渡った人物は、ご覧通り図3の堂々たる風貌をそなえた吉士長丹です。



図3 吉士長丹像（東京国立博物館）

この肖像画の原本は古くから近江国蒲生郡中村の呉神社に伝来し、いくつかの模写品が現存していますが、図3は東京国立博物館にある模写本のひとつです。東野治之氏は、この肖像は儒教の聖賢像とおぼしき風貌に描かれていると述べておられますが、正鵠を射当てているご指摘です。⁶⁾

この図について問題となるのは、いつ、どこで、誰の手によって描かれ、何のいきさつ

で呉神社に伝わったのか、等々です。

『日本書紀』によれば、吉士長丹は唐の高宗皇帝にまみえて「多得文書宝物（多く文書宝物を得たり）」という実績で、帰国後に天皇より「呉」の姓を賜わり、位階も相当あがったそうです。「呉」という姓がおそらく呉神社との接点になるのでしょうか。

この肖像画は昔から古代の服装や冠位の復元に利用され、作成の時期がかなり古いことを示唆してくれます。しかし、奈良時代の絵画にはこうした類例は見つかりにくく、平安時代にあってもきわめて異色の存在といわなければなりません。

つまり、その画風・技法・色彩・様式・構図などは、どちらかといえば、中国風という結論に到達しやすいのです。したがって、それも藤原清河らと同じように、唐の宮廷画家によって描かれ、そのコピーを持ち帰った吉士長丹本人、またはその子孫や関係者らが縁りの神社に奉納されたのではないかと推測されます。

『隋書』（巻六七・裴矩伝）は裴矩の著『西域図記』について、「依其本国服飾・儀形、王及庶人、各顕容止、即丹青模写、為『西域図記』、共成三卷（その本国の服飾と儀形に依り、王及び庶人が各々容止を顕わすように、丹青に即して模写し、『西域図記』を為る。共に三卷と成る）」とあります。

裴矩の『西域図記』は「丹青」つまり彩色で描かれていることがわかり、色鮮やかな『吉士長丹像』も大陸的な構図や着色などの特徴が鮮明に見てとれ、中国の宮殿画家の手によって製作された可能性はなしとしません。

もし右の推測が幸いにも的中したとすれば、藩蔵に納められたもう一枚は、唐代随一の肖像画家とされる閩立本の『諸夷図』に生かされたという可能性も出てきます。明・卞永譽『式古堂書画彙考』によれば、六六八年つまり吉士長丹の入唐から約十五年後、右丞相となった閩立本は、高宗皇帝から外国の朝貢使節を模写するよう命じられ、二十六か国の二十八人を描いたと伝えられます。残念ながら『諸夷図』はいま伝わらず、遣唐使が登場したかどうか、登場した

とすればどういうふう描かれているかを知るよしもありません。ただし北宋のころ、李伯時という人物が『十国図』^⑦を描き、十か国の一番に日本を位置づけていることから類推すれば、両国の関係がもっと緊密だった唐代、とくに数度にわたって遣唐使の謁見を受けていた高宗のころ、日本の遣唐使を二十六か国から外す理由はどこにもありません。

5. 坂合部大分（第八次の遣唐大使）

このように、作成のいきさつに不明な点がなおも残ってはいますが、遣唐大使の風貌を吉士長丹の肖像にかいま見ることができました。しかしそれは、東野治之教授のご指摘通り、中国の聖賢像にあやかって、いささか類型化している傾向が見られます。パターンに嵌まるということは、個性を殺すことでもあります。

これに比べて、文字資料における人物描写は、絵画ほど様式にとらわれず、より写実性に富んでいるものがあります。粟田真人の装束についての詳細な描写は先ほどふれた通りですが、遣唐使の身体的特徴までリアルに描く記録さえあります。

『遊仙窟』の著者として知られる唐の文人張鷟（字は文成）の著わした『朝野僉載』巻四に、朝廷の高官十五名にそれぞれユニークな渾名をつけ、それが災いのもとになって、左拾遺から地方の県尉に左遷された魏乗光の逸話が載せられています。そのなかで「長大少髪」の舍人呂延嗣が「日本国使人」と渾名されています。

この史料を日本で初めて紹介された加藤順一氏は、文中の「日本国使人」とは粟田真人とともに入唐し、十余年におよぶ在唐生活をおくった大使の坂合部大分がそのモデルだろうと考えておられます^⑧。肝心の人物呂延嗣について、加藤氏はその伝記を不明とされていますが、その後、池田温氏は唐代の史料を丹念に調べられ、呂延嗣とは開元初年ごろ紫微舍人として活躍した「呂延祚」の誤写であると考証されました^⑨。

『朝野僉載』の著者張文成は、『旧唐書』や『新唐書』の「張薦伝」により
ますと、新羅や日本の遣唐使が長安に来るたびに、大金をなげうってその詩文
を買い求めたとあり、文名を東アジアに広げていたことがわかります。著者自
身もおそらく日本使との交流があったと思われ、史料の信憑性が高いと見てよ
いでしょう。

遣唐使といえば、背丈が高くて髪の毛が薄いというイメージが、八世紀の初
めごろ成立していたのです。遣唐使以外に日本人と接するチャンスのない唐代
にあって、それがそのまま中国人のもつ日本人像になったのかもしれませんが。
遣外使節の容貌がその国のイメージ作りにどれほどの意味を持つかは、この一
例によっても推し量られます。

6. 片目と歪み鼻

外交使節、わけても使節団の長なる大使は、ある意味ではその国の顔となり、
当然のことながら、五体満足、威風堂々の人物を選抜することになりますが、
そうでない人物が使者に選ばれますと、ひどい目に遭うことがあります。

朝鮮半島の『罷睡録』という書物には、鼻のやや歪んだ中国の使節と片目の
朝鮮側の応接使が国家の面子をかけて、絶妙に駆け引きをしていた逸話が紹介
されています。

いつの時代のことが明らかではないが、中国から一流の学者が使節として朝
鮮に遣わされることになりました。朝鮮の国王はその接待に大慌てで、国の恥
とならないように国中から学者を公募しましたが、誰一人として名をあげるも
のはいませんでした。

国王をはじめ大臣らは困り果てていると、金春沢という片目の名もない男が
あらわれ、是非その大任を任せてくれと名乗り出ました。学識をためすと相当
なものようですが、片目とは外交の任にふさわしくないのを承知のうえ、急
場を救うことで、国王はやむなく金春沢を応接使に任命しました。

こうして、風采の振るわない、見すばらしい片目の応接使がさっそく船頭の

姿に身をやつして、国境近くの波止場で待っていると、威風堂々の中国使がまるで風を切るようにやってきました。片目の船頭を見るや、「鳥喙使工目（鳥は船頭の目を喙む）」と揶揄しましたら、応接使は使節の鼻がすこし歪んでいるのに目をつけ、すぐに「風吹都士鼻（風は使節の鼻を吹く）」と返しました。使節は弱みをつかれ、今度は学問で勝負しようと「棹穿波底月（棹は波底の月を穿つ）」と詠んだら、船頭はすかさず「船圧水中天（船は水中の天を圧む）」とつなぎました。

結局、この二人は学問も五分五分で、容貌も五十歩百歩というところで、好勝負となったわけですが、容姿にめぐまれない外交官がいかに人一倍の苦勞を強いられるかは、この一例でもお分かりになったと思います。

さて、話を日本の遣唐使に戻しますと、なぜ髪の毛の薄い人物が大使に選ばれたのか、これから述べる遣唐使の選抜慣例からみれば、きわめて異例と認めなければなりません。勝手な憶測を許していただければ、帰国のチャンスを逃して十七年間も異国にとどまり、ホームシックに悩まされて髪の毛が年ごとに抜けてしまったということも考えられなくはありません。さもなければ、日本人のなかで珍しい長身という身体的特徴を買われ、髪の毛がやや薄くても大使に任命されたのかもしれない。

7. 遣唐使の選抜

それでは、日本の遣唐使はいかなる基準によって選ばれたかを考察してみましよう。

この点について、森克己博士が早くから指摘された通り、遣唐使は唐の先進文明を輸入するとともに、「唐朝に集まる各国使臣の中にあつてわが国際的地位を高める」任務を背負わされているのです^⑩。さらに森克己博士は、「国際的地位を高める」使命を背負う使節を選ぶとき、「容貌・風采・動作・態度など選考の条件にしている」と指摘しておられます^⑪。ミスコンクールでもないのに、「本当かなあ」と小首をかしげる方もおられましようが、どうも本当のようで

す。

天平十八年（七四六）、朝廷で緊迫した雰囲気のなかで、遣唐大使の選考が行われていました。この情景を『懷風藻』はつぎのように伝えています。

天平年中、詔簡入唐使。元来、此挙難得其人。時選朝堂、無出公右。遂拝大使、衆僉悦服。（天平年中に、詔して入唐使を簡ぶ。元来より、此の挙は其の人を得難し。時に朝堂に選び、公の右に出づる無し。遂に大使に拝せられ、衆僉な悦服す。）

「衆僉な悦服」して選ばれた石上乙麻呂は「地望は清華にして、人才穎秀たり。雍容閑雅にして、甚だ風儀を善くす」と記され、『懷風藻』の著者は学問よりも風貌のほうに注意を向けている印象を受けます。つまり、学問がいくら優れていても、もし顔立ちがパツとせず、あるいは背丈が低すぎるならば、大使として失格することになるようです。「其の人を得難し」とは、おそらく事実だったのでしょう。

大使副使をはじめ遣唐使人の美貌を賛美する言葉は、日本の諸文献から多く拾われます。たとえば、藤原常嗣は「立性は明幹にして、威儀は称うべし」（『続日本後紀』）、菅原善主は「聡恵にして容儀を美しくす」（『文徳実録』）、藤原松影は「人となりは厳正にして、鬚眉は画くが如し」（同上）、小野篁は「身長は六尺二寸あり」といった具合です。

8. 唐人の評価

このように、日本の朝廷が神経を尖らせて選出した遣唐使人は、ほぼ祖国の期待通り、異国の人々によいイメージを植えつけることに成功していると思われる。藤原清河や粟田真人の例はすでに紹介しましたが、その他の例をいくつかあげましょう。

斉明天皇五年（六五九）、四回目の遣唐使にしたがって入唐した伊吉博徳が、渡航の様子を書きとめた記録は「伊吉博徳書」として『日本書紀』に引かれています。それによりますと、同年十一月一日に洛陽で行なわれた冬至の儀に参

列した諸国の使節のなかで、日本の遣唐使は「最も勝れたり」と評価されたとあります。

もう一例をあげます。『続日本紀』に「わが朝の学生にして、名を唐国に播ぐる者は、ただ大臣と朝衡の二人のみ」と激賞された朝衡こと阿倍仲麻呂は、唐の文人と広く交遊し、それを示す漢詩がいくつか現存しています。

儲光羲という唐の詩人はその詩に仲麻呂の容貌を「美無度」と表現しています。「美無度」とは「美^{はか}る無し」と訓みますが、中国書家の模範とされる王献之について、宋の周密が「王郎擅風流、筆墨美無度（王郎風流を擅にし、筆墨の美^{はか}る無し）」と賛美するように、美の極致を言い表しています。これで、仲麻呂が美貌の持ち主だったことがおわかりになるのでしょう。

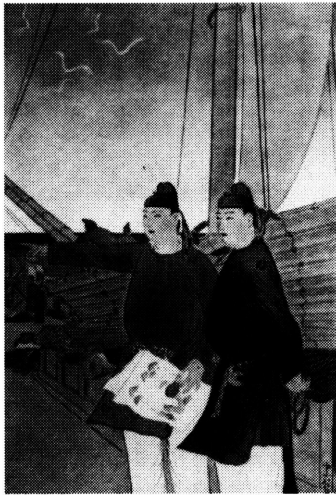


図4 阿部仲麻呂と吉備真備

図4は鈴木朱雀という画伯が描いた作品ですが、立ち並んでいる二人のうち、誰が阿倍仲麻呂、誰が吉備真備なのかと、この図版を拙著『中国史のなかの日本像』（農文協、二〇〇〇年）に使うとき、出版社の編集担当から問い詰められ、はっきり答えることができませんでした。もし画伯がさきの「美無度」の言葉を知っておられるならば、美しいほうが阿倍仲麻呂でしょう。

鈴木朱雀氏は日本人ですが、中国人の手によって描かれた遣唐使人の絵画として、比較的の可能性の高いのは、台湾の故宫博物院に

現存する図5の『明皇会棋図』だろうと思われます。

『懐風藻』の弁正伝に「大宝年中、遣学唐国。時遇李隆基龍潜之日。以善囲碁、屢見賞遇（大宝年中に、唐国に遣学す。ときに李隆基が龍潜の日に遇う。囲碁を善くするを以て、しばしば賞遇せらる）」とある記述によって、中央の明

皇（玄宗）に向かって左から三人目が入唐僧弁正その人だろうと推定されます。¹²⁾

弁正は『懷風藻』に立派な漢詩二首を残しています。その風貌といい、その学識といい、最古の倭人像と比較してください。その堂々たる風貌を鏡にすれば、今日の日本像がかえって見劣りするのではないかと心配するほどです。

以上は、ざっくばらんに遣唐大使をめぐる中国側の文字資料と絵画資料を一通り概観してまいりました。ここで明らかになったことは、文字には視覚的なイメージが潜んでおり、絵画には歴史的な文脈が隠されていることです。ある歴史的事件を総合的に解明し、ある歴史的人物を立体的に把握しようとするれば、文字資料と画像資料の両方を使うべきだとつくづく感じながら、本日の話を終らせていただきます。

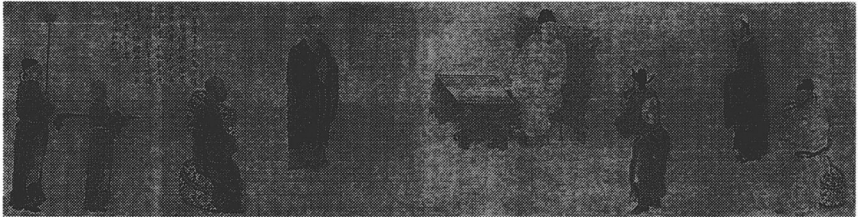


図5 明皇会棋図

[注]

- ① 上田正昭「職貢図倭人の風俗」、『風俗』3-4、一九六四年三月。
- ② 増村宏著『遣唐使の研究』、同朋舎出版、一九八八年、三八八頁。
- ③ 中西進、王勇共編著『日中文化交流史叢書・人物』、大修館書店、一九九六年、六八～六九頁。
- ④ 陝西省博物館乾県文教局唐墓発掘組「唐章懷太子墓発掘簡報」、『文物』一九七二年七月号。
- ⑤ 王仁波「従考古発現看唐代中日文化交流」、『考古與文物』一九八四年三月号。
- ⑥ 東野治之「遣唐使研究と吉士長丹の肖像画」、『遣唐使が見た中国文化』所収、奈良県立橿原考古学研究所付属博物館、一九九五年。
- ⑦ 榎一雄「梁職貢図の流伝について」（鎌田博士還暦記念会編『歴史学論叢』所収、一九六九年九月）は李伯時を「恐らくは唐代の画家であつたろうか」と推測しているが、『朱子語類』（卷一二七・本朝一・哲宗朝）に「紹聖四年、長安民家得秦璽、改元元符。是時下公卿雜議、莫有知者。李伯時號多識、辨其果秦璽、遂降八寶赦」とあるところをみれば、紹聖四（一〇九七）年まで生きている宋代の人物である。
- ⑧ 加藤順一『『朝野僉載』に見える「日本国使人」——遣唐使人の容姿をめぐる——』、『芸林』第三八卷第三号、一九八九年九月。

- ⑨池田温「日本国使人とあだ名された呂延祚」、『日本歴史』五一三号、一九九一年二月。
- ⑩森克己著『遣唐使』、至文堂、一九九〇年重版、九四頁。
- ⑪森克己前掲書、九七頁。
- ⑫この絵画の考証について、詳しくは拙著『唐から見た遣唐使』（講談社、一九九八年）九九～一〇四頁を参照されたい。

*図版のうち、図3は週刊朝日百科 日本の歴史別冊 歴史を読みなおす4『遣唐使船 東アジアのなかで』（1994年1月）より転載した。